

ヘーゲル『法（権利）の哲学』刊行二〇〇年記念シンポジウム：人倫構想と現代：ヘーゲル『法（権利）の哲学』、刊行二〇〇年に寄せて

著者	滝口 清榮
出版者	法政哲学会
雑誌名	法政哲学
巻	17
ページ	25-26
発行年	2021-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00024416

ヘーゲル『法（権利）の哲学』、刊行二〇〇年に寄せて

滝 口 清 榮

ヘーゲルの『法（権利）の哲学』が刊行されて、二〇〇年の歳月が過ぎ去った。ヘーゲルの著作は意外に少なく、主なものは『精神現象学』、『大論理学』、『エンチクロペディ』、『法（権利）の哲学』の四冊を挙げることができるだけである。ヘーゲル没後、弟子たちが企画したベルリン版全集には、ヘーゲルの講義活動をもとにして（学生による講義筆記録）、全集の体裁を整えるために、編集された講義類が収められた。これら講義類は、『歴史哲学講義』のように分かりやすさも手伝って広く読まれ、後世にさまざまな影響を与え続けた。しかし今日、講義の各分野で新たに各年度の講義筆記録が発見され、それらの研究を通して、完成された体系的哲学者というイメージに代わって、ベルリン時代にいたってもなお思索を練り直し続ける哲学

者というイメージが浮かび上がっている。

さて『法（権利）の哲学』は、そもそも「講義のための手引書」として書かれたもので、立ち入った説明は講義の中で行われるという特異な性格を持っている。この書はその成り立ちからしてふつうの著作とは趣きを異にしている。しかもこの書は刊行以来、その解釈をめぐり論争が絶えなかった。一九世紀に目を向けてみる。保守派の論客 K・E・シュバルトは、ヘーゲルの国家は「君主主義的な見かけをもつ共和制」であり、「反プロイセン的方向」を持つと批判したが（「ヘーゲル国家論の、プロイセン国家の至上の生活ならびに発展原理との非両立性について」一八三九年）、それと対極的に R・ハイムは、『法（権利）の哲学』は時代の「樂觀主義と静寂主義」のもとで「反動

の精神をもたらし、それを定式化した」と述べる（『ヘーゲルとその時代』一八五七年）。このラインは、ヘーゲルを「二〇世紀全体主義の起源」（『開かれた社会とその敵』一九四五年）とするK・ポッターに通じている。一九世紀論争史の中には、その後の争点がほぼ出尽くしているほどである。

二〇世紀後半、イルティンクがベルリン大学での法哲学講義の筆記録を公開したことを皮切りに（一九七三、七四年）、八〇年代に入り、ハイデルベルク大学時代、さらにベルリン時代の他の年度の講義筆記録の発見と公開が進み、ヘーゲル法哲学研究をめぐる環境が格段に整った。イルティンクは原・法哲学と言うべき一八一七・一八年講義筆記録（ヴァンネンマン）を公開し（一九八三年）、「立憲君主制」概念をめぐり、この講義と同時代フランスの立憲主義思想との深いつながりに踏み込んでみせた。長く「深い思想的矛盾」（ローゼンツヴァイク『ヘーゲルと国家』一九二〇年）と見られてきた争点に、同時代影響史からア

プローチすることが可能となった。ヘーゲル法哲学は、形成史的研究、同時代影響史的研究の成果をもとにして、新たな思想像を描きなおよす段階を迎えている。

そもそも『法（権利）の哲学』は、法—正義、権利、道徳、家族、市民社会、国家など、人間の実践的領域全体をあつかう包括的理論という性格をもっている。現代的関心からこの書を読むときに、有益な思索をそのあちこちに見出すことができる。二一世紀に入り、「公共哲学」の名を冠した思想潮流が生まれ、その観点からヘーゲル法哲学を読み直そうとする流れも生まれている（例えば福吉勝男氏、山脇直司氏）。これはヘーゲル法哲学の現代的可能性を示すものであるが、今回のシンポジウムで取り上げられた、偶然性と必然性という観点からの、そして多文化主義的観点からの読解の試み、そしてヘーゲル権利論から身体論の可能性を読み取り、社会福祉論に寄与しようとする試みを、現代のプリズムを通じた読解の試みと受け止めていただけると幸いである。